

# 大野弁吉著 『一東視窮録 製薬 上』を読む

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 板垣 英治, 本康 宏史  |
| 雑誌名 | 北陸医史  |
| 巻   | 36  |
| ページ | 36-56   |
| 発行年 | 2014-02-20  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2297/36976">http://hdl.handle.net/2297/36976</a> |

# 大野弁吉著

## 『一東視窮録 製薬 上』を読む

金沢市 板垣英治  
金沢市 本康宏史

大野弁吉は「加賀の奇才」「加賀の平賀源内」と呼ばれ、文政十三年(1830)に金沢・大野へ京都からきたからくり師(職人)である。弁吉については、これまでに数多くの記述があり、彼の人物評価が行われて来た(1, 2)。弁吉の業績の凝集されたものが『一東視窮録』(3)であり、本書には、舎密学関係百五十九件、科学器具関係三十一件、医術・本草学関係百件、伝統技術関係百四十六件の項目が記載されている(4)。弁吉の業績を正しく評価するために、各記載事項を解説して現代の知識で評価することが必須であるが、まだ、どの項目もその段階に到っていない。

本論文では、『一東視窮録 製薬 上』中の医術・本草学関係の項目に限定して解説をおこなった。そこには多くの薬剤の処方箋が記載されている。これが、わが国古来からの漢方によったものか、或いは江戸後期に長崎に渡来した蘭学に含まれた蘭医学による蘭方処方によったものかを

調査・研究した。解説のためには、本康により日本薬史学会(2006年)講演要旨集(5)に掲載された翻刻資料及び小林の「絡繰り師弁吉」の研究報告書(2)を使用した。両資料には、処方の分類をすることなく記載されているために、本論文では、各処方の治療目的に応じて、内科・呼吸器科と消化器科、泌尿器科、産科、眼科、耳鼻科、齒科、外科、皮膚科、その他への分類を行って記載した。原文は漢字・カタカナで表記し、解説・解説文は漢字・ひらがなで表記し、必要に応じて薬用植物の学名を記した。原文の翻刻文の左側に10ポイント文字で、三文字下げて解説文を記載した。なお、翻刻資料には誤字や解説不可能の文字もあるが、調査により明らかになったものは、正しい文字で記した。なお、小林の資料からの処方には、番号の次ぎに「\*」を付けて区別した。さらに同資料には処方名のみしか記載されていないために、多くの解説・解説不可能なものがある。これらは本文末にまとめて記載した。解説、解説のための参考資料はネット検索により殆ど得たために、特に資料名は掲載しない。

一東視窮録 製薬 上 鶴寿軒 薫 (花押)

I. 内科

呼吸器科

1. 狂気或小児セキ

曼荼羅 細末、丁子末 少シ、飯丸 五分、白朮丸。

狂気、狐狸付ヲ下ス。

曼荼羅を集め細末にする。これに丁子（花、蕾の乾燥物）を加え、飯を加えて能くねり丸薬とする。一丸は壹匁。

狂気と狐狸付（異常心理状態）を治める。

曼荼羅は朝鮮アサガオの実、麻醉作用、丁子のユーゲノールにも麻醉作用あり。

2. ホルトス

硫黄 三匁、硝石 一匁、大黄 八匁、甘遂 八匁、四味為糊丸。

ムネヤケ、癩氣二効アリ。

硫黄 殺虫医瘡、止痒 頑固で堅い陰疽（化膿傾向に乏しい慢性炎症）、頑癬、瘰癧などに、輕粉、雄黄、枯礬、竜腦などと粉末にして外用する。

硝石 利尿作用、吐痰作用、清涼劑。

大黄 瀉イオウ、タデ科、ラバルバルム、センナの根茎。

消炎、止血、緩下作用、瀉下劑、便秘に効、有効成分

センノサイド。

甘遂 カンツイ、トウダイグサ科 *Euphorbia kansa* の根、有毒植物、全草、特に根茎に有毒成分、ガンマオイル・ホルボールが多い。嘔吐、腹痛、下痢などの作用

あり。利尿、胸内停水、むくみには乾燥根茎を煎じて服用。

『蘭方ハルトス弘方心得書』 出版年、出版者 不明、あり。  
「PLUM MIDDLE ホルトス」

喘息、労咳、氣腫、脹滿、膈症に効あり。

大阪本店 長堀橋南摘 大橋喜兵衛

御免蘭方 ホルトス 長崎 觀生堂鑒製（6）

3. 琥珀油「ヨーリーハンバルステーン」

olie von Bernstein

琥珀 三分洗い、乾砂 二分、琥珀粗碎 砂ト合ス。

列篤兒多（レトルト）、蒸留の精（液）、浮油 滴ス。

琥珀の乾留により淡黄色の油が得られる。黒変しやすい。

作用：鎮静、鎮痛、鎮痙薬、去痰、解熱、抗けいれん。

適用、喘息、リウマチ。

4. 八味地黄

熟地黄 八十、山藥・呉茱萸 四十、茯苓 三十、沢瀉

三十、牡丹皮 三十、附子 十、肉桂 十。

丸薬トシテ使用。

熟地黄 アカヤジオウ、ゴマノハグサ科、*Rehmannia*

*glutinosus*。地黄は根を陰干した生地黄、これを天日

干した乾地黄、生地黄を酒と共に蒸した熟地黄がある。

内服薬として補血・強壯・止血作用がある。

山藥Ⅱサンヤク、長いも、イリドイド配糖体、甘味。

呉菜更Ⅱサンシユ アキサンゴ 強精薬、

止血解熱作用あり。

茯苓Ⅱマツホド（菌類）サルノコシカケ科 利尿鎮痛劑。

沢瀉Ⅱタクシヤ、オモダカ、利尿作用、コレステロール降下作用、血糖・血圧の降下作用、抗菌作用、抗脂肪肝作用があり、利尿、止渴薬として使用。

牡丹皮Ⅱボタンヒ、根部の樹皮、ベオノール、消炎、止血、鎮痛作用あり。

附子Ⅱキンボウゲ科ハナトリカブト *Aconitum camichaeli*

の塊根を加工調製品。アコニチン・アルカロイドを含み、猛毒性あり。減毒して使用。利尿、強心、鎮痛作用あり。四肢関節麻痺、疼痛、虚弱体質者の腰痛、下痢、失精など内臓諸器官の弛緩による症状の復活に応用する。

肉桂Ⅱニツケイ、クスノキ科の常緑高木の樹皮を乾燥物、香味料、薬用とする。

## 5. 蚕砂

カイコノフン 六匁、当帰、木蓮、芍薬 各一匁、耳草六分、為七服煎用ユ。

カイコ 蚕砂さんしゃ乾燥したカイコの糞便、蚕タンパク質、尿酸カルシウム、葉緑素など。

鎮瘡、鎮痛薬、小兒瘰癧、扁桃炎、頭痛、歯痛、解熱作用

抗瘰癧、去痰作用がある。

トウキ（当帰、*Angelica acutiloba*）は、セリ科シンワウド属の多年草の根、血液循環作用、充血の痛みの緩和に有効。膿を出し、肉芽形成作用があるとされている。

日本薬局方では「生薬トウキ」の基原植物は、トウキおよびホツカイトウキとされる。

木蓮Ⅱ辛夷 シンイ、日本産コブシ (*Magnolia kobushi* De Candolle)、タムシバ (*Magnolia salicifolia* Sieb. et Zucc. Maxim. 花蕾を採取して風通しの良い日陰で干して乾燥させた物を薬用として用いる。

辛夷Ⅱ（タムシバ）にはシネオール、 $\alpha$ -ピネン、シトラール、カンファール、サフロール、メチルオイゲノール、精油などを含む。辛夷は鎮静、鎮痛、消炎作用があり、頭痛、頭重、鼻炎、鼻づまり、蓄膿症、鼻閉、濃い鼻水、眩暈などに効果があり。

芍薬Ⅱシヤクヤク *Paeonia lactiflora* Pallas（ボタン科

*Paeoniaceae*）の根を乾燥したもの。成分、モノテルペン配糖体・ベオニフロリン（*paeniflorin*）、アルビフロリン（*albiflorin*）等、その他安息香酸、ガラタンニン等。

鎮痛・鎮瘡薬、婦人薬、冷え症用薬、かぜ薬、皮膚疾患用薬、消炎排膿薬。

耳草 〓 ユキノシタ。

中耳炎、腫れ物、できもの、ひきつけ、痔、むくみ、  
てんかんに効あり。

6. \* 金露丸 〓 中藥方劑、二日酔い、痰多、咳嗽に使用。

人参 三分、知母 三分、元母 三分、甘草 三分、

烏梅肉 一分、桃仁 半分、杏仁 半分。

7. \* 枇杷葉茶 〓 ビワの葉茶、痰、咳嗽に効アリ。

8. 瘡落葉

テマリ花、影乾、耳草口。

如常煎 夜露ヲ取 病朝冷服。

テマリ 〓 山アジサイ、アジサイ。

解毒劑、風邪の解熱、痰止め、民間藥。

9. \* 風タンセキ妙藥

(処方箋の記載がない)

10. 一切頭痛

酒製大黃 五匁、當歸 同、芍藥 同、川芎 同、常如

ク煎用。

川芎 〓 せんきゅう、セリ科センキウウ *Cnidium*

*officinale* の根茎を、湯通・乾燥したもの。刺激性の

ある辛みと、セロリに似た強い臭いあり。鎮痙劑・鎮

痛劑・鎮靜劑としての効能がある。

11. 辰砂散

乾姜末、耳草末、辰砂末、各五分、白湯二トカス。

乾姜 〓 ショウガ科しょうがの根茎。乾姜は生姜を乾燥し  
たものを蒸乾したもの。乾姜の主な効能に温裏・補陽・  
化痰などがある。

耳草 〓 ユキノシタ、中耳炎、腫れ物、できものに効あり。  
辰砂 〓 硫化水銀、伝統中国医学では「朱砂」や「丹砂」  
等と呼び、鎮靜、催眠の為に、現在でも使用。

睡眠藥

消化器科

12. 丁子油 ナーゲルラーリイ *Nagel olie* = clove.

丁子新口者 九十六匁、食塩 八匁、酒石 四匁、雨水  
五百七十六匁。

攪合浸事、一昼夜 蒸露缶上炭火從文 至武 初滴者  
淡二テ去 之更接蛇管及壘漸進其火 清清液 雜油  
其氣盡乃止 分油貯。

丁子油 クローブ (*Clove*) は、フトモモ科のチョウジ

ノキ (*Syzygium aromaticum*, syn. *Eugenia*

*aromatica*) の開花前の花蕾を乾燥させた香辛料名前

花蕾を丁子<sup>ちんし</sup>または丁香<sup>ちんかう</sup>とも言う、芳香健胃劑。

香氣成分はオイゲノール (*Eugenol*) で、クローブの精油  
には殺菌・防腐作用あり、弱い麻酔・鎮痛作用もある。

歯痛の鎮痛劑として使用される。

酒石 *tartr* 酒石酸カリウム、ブドウ酒の貯蔵により  
沈殿物として酒石が出来る。

13. 吐葉

瓜蒌 <sup>かいてい</sup> 越前産用赤小豆、

各細末口ト塩油ニテ用イル。

瓜蒂散 (不吐者少加之、以快吐為度而止) (瓜蒌・赤小豆、

金匱要略中「一回服用して経過觀察」の指示のある方劑、

傷寒論中「頓用 (一度に全部服用)」の指示のある方劑、

14. 瘡切葉 (漢方) ギヤク、オコリ

常山 *Dichroa febrifuga* (ユキノシタ科) の根部を使用、

マラリアの治療薬や解熱劑、

15. 茯苓、丁子、御種ニンジン、乾姜、

御種ニンジン  $\parallel$  朝鮮人參、主要な薬用部位は根で有用成

分はジンセノサイド (サポニン) で、糖尿病、動脈硬

化、滋養強壮に効能がある、

茯苓  $\parallel$  (前に記載)

丁子  $\parallel$  (前に記載)

乾姜  $\parallel$  (前に記載)

16. 回春酒製

大茴香 一匁、丁子 二匁、肉桂 三匁、益智 四匁、白

檀三匁、氷砂糖 十五匁、

丁子は 前に記載、

大茴香  $\parallel$  ダイウイキョウ *Illicium verum* 中国原産、

シキミ科常緑高木の果実を香辛料に使用、ウイキョウ

の精油、漢方では腰痛に使用、胃腸機能回復、

鎮痛劑、有毒成分 *shikimin*、嘔吐、脚氣に効あり、

肉桂  $\parallel$  クスノキ科の常緑高木、中国・インドシナの原産、

江戸時代に中国から渡来した、樹皮を漢方では桂皮、

桂枝ともいう、香味料にも使用する、

益智 <sup>やくち</sup>  $\parallel$  ヤクチ、シヨウガ科の植物、学名

*Alpinia oxyphylla*、中国南部に分布する多年生草、

果実を益智と称し生薬にする、健胃作用、抗利尿作用、

唾液分泌抑制作用がある、

白檀 *Sandalwood oil*、頭痛、体調不良、アロマテラ

ピー、

17. 阿片丸

赤丁子 一匁六分、肉桂 同、阿片 同、大黃 六分五厘、

龍腦 五厘、

為糊丸 二十匁、大人 一服、小人 半服、

赤丁子  $\parallel$  ベニチヨウジ、紅丁子、*red cestrum* か、

阿片  $\parallel$  アヘン、麻薬、ケシの実から生産される、

龍腦  $\parallel$  ボルネオール、竜腦樹はスマトラ島北西部のバル

ス (フアンスル) とマレー半島南東のチューマ島に産

した、香氣は樟腦に勝り価格も高い、香料、

18. カズカイ膏

半夏、飯粘ニテネリ付、

鎮吐作用、鎮嘔、鎮咳、祛痰作用、

19. ウユルス（ウユルス）

マグネシヤ 十匁、硝石一匁、甘遂 四匁、阿仙葉 四匁、

コノ四味 為糊丸、

ウユルスは和製オランダ藥処方である、

マグネシアニ下劑、排便作用、

硝石ニ利尿作用、

甘遂ニ（前に記載）

阿仙葉ニガンビノールノ木、*Uncaria gambir*の葉、枝の

乾燥物、褐色タンニンを含む、整腸、收斂作用、止

瀉藥、

20. \*調榮湯ニ胃腸・消化・貧血等に効あり、

人參、當歸、白朮、茯苓、地黄、桂皮、芍藥、陳皮、甘草、

五味子、

21. \*赤玉神教丸ニアカダマシンキョウガン、消化不良、

二日酔い、胃腸障害の改善、

黄柏ニ苦味健胃藥、生姜ニ健胃藥、食欲増進、當藥ニ

センブリ、苦味健胃藥、白朮ニビヤクジュツ、芳香健

胃藥、ゲンノシヨウコニ下痢止め、胃弱、枳實ニカラ

タチの実、芳香健胃藥、ゲンチアナニ苦味健胃藥、山

椒ニ消炎、利尿、健胃藥、胡椒ニ胃弱、下痢等、

22. \*水腫脹滿鼓脹ニ蒼朮、白朮、茯苓、陳皮、枳實、香附子、

猪苓、沢瀉、大腹皮、砂仁、木香を使用した煎藥、

万病回春藥、

23. \*牛膽熊膽代ニ熊の胆嚢の代わりに牛の胆嚢を使用し

た胆汁酸エキス、胃腸藥、

## II. 外科・皮膚科

24. \*麻沸湯ニまふつとう、麻醉藥、

華岡青州著「青囊秘録」

曼荼羅実 六錢、百芷 一錢、南星 一錢、

當歸 三錢、川芎 六錢、烏頭 一錢、

六種を粉にして煎じ服用、

曼荼羅実ニ朝鮮アサガオの実、強い毒性、鎮痙作用、

百芷ニセリ科シシウド属ヨロイグサ *Angelica dahurica*、

の根の乾燥したもの、皮膚に潤いを与え、かゆみを抑

える作用がある、解熱、鎮痛、解毒、排膿、

南星ニサトイモ科テンナンショウ属、天南星、ウラシマ

ソウ、生の根茎に毒成分を含む、

中毒症状：胃腸障害、麻痺作用、

烏頭ニ附子、トリカブトの根で、温熱作用、腹部の冷え

症、下痢に効あり、

25. 止血

キレンケツ 細末、一味振力ケ 手ノヒラニテ シバラク  
押付居ナリ。

麒麟血Ⅱトウ属キレンテツ属、龍血樹、キリケシヤ、

*Dracaena cochinchinensis*, ヤシの一種、収斂作用、

止血作用あり。

26. 血止妙薬

活鼠方、ウゴロモチ（モグラ）、土龍 一箇服。

腸去内ニ紅花一盃入テ、霜ニシテ為切 口点或ハ舌之上

ニ少シ置、又ノ法 寒晒、石灰、虎枝根、乳香、沒藥、

玉子白身 皿ニ入レ、乾、各末 疵口ニ付。

鼯鼠、ウクロモチⅡモグラの黒焼きは土龍霜と呼ばれ、

民間薬として使用。強壯作用、興奮作用、排膿作用が

ある。『大和本草』に「肉ヲ焼テ癰疽諸瘻ヲ治スト云ウ」、

即ちオデキや痔の化膿したものを治す。

虎枝根Ⅱユキノシタ（前に記載）

乳香Ⅱムクロジ目カンラン科ボスウェリア属の樹木から

分泌される樹脂であり香料として使用する。中医薬・

漢方薬としても用いられ、鎮痛、止血、筋肉の攣縮攣

急の緩和に効能がある。南アラビア地域では唾液分泌

の促進やリラクゼーションのために乳香樹脂をガムの

ように噛む。

沒藥Ⅱフウロソ目カンラン科コンミフオラ属（ミルラ

ノキ属）の樹木から分泌される樹脂。殺菌作用を持つ

ことが知られ、鎮静薬、鎮痛薬としても使用される。

27. 華岡流バジリコン油

麻油 百五十目、黄蠟 六十目、唐チャン 三十目、松脂

八十五目、各一度溶シ 布コシ。

麻油Ⅱマー油、焦がしニンニクの油。

黄蠟Ⅱ蜜ロウ、下痢、皮膚の化膿、火傷に効あり。

唐チャンⅡ 不詳

バジリコンⅡしそ科メボウキ属メボウキ、バジル

*Ocimum basilicum* の精油、オシメン、シナロール、

メチルカピール、リナノール等を含む。

消毒剤、祛痰剤、鎮痙剤として使用。

麻油、黄ロウなど四種の油脂を混合し、華岡流バジリコ

ン油と呼んだものと見られる。

28. バシリコン Basilica oile

オリーブ油、黄蠟、松脂、チャン。

吸い出し膏薬

29. \*チャン（乾油）Ⅱ亜麻仁油・桐油・芥子油・紫蘇油・胡桃油・

荏油・紅花油・向日葵油など、不飽和脂肪酸を多く含む。

30. \*鹿角精Ⅱロツカクセイ、鹿の角から作る塩、

炭酸アンモニウム、鎮痙作用有り。



31. \*金瘡湯||金瘡油? 「紅毛外科金瘡療治」には、

「一 葉油 是八南蛮人用ヒル葉ナリ、ヤシノ油ヲ熱シテ、銅ノヘラヲ入テ、其ニテ交ゼ、コレヲ入レテ其疵口ヲナデ又ハ穴ヘモコノヘラ銅ニテ入テソレニ阿仙葉ヲ付テ入ルナリ。」とあり傷口にヤシ油を塗り、化膿を防いでいた。

32. 火傷

黄柏細末 二匁、炒黄柏 一匁、輕粉 少し。

和上品 油煙曇ヲスリ溶シ塗傷 亦法 胡麻油十匁、反腦一匁、白蠟四匁拌合。

黄柏||キハダの樹皮(表皮を除いたもの)、ベルベリンを含み、強い抗菌作用を示す。

反腦||へんのう、龍腦香(略)樟腦再燒者名反腦とある。樟腦を再精留して透明にしたもの。

白蠟||日光にさらした木蠟。

33. 指之病

半分服用、半分付ル

当飯、川芎、桂皮、地黄、大黃、耳草、

四物湯加減之藥。

川芎||センキュウ、セリ、*Cnidium officinale* 根茎、

補血、鎮靜、鎮痛作用あり

当飯||当帰

桂皮、地黄、大黃、耳草、は前に記載。

34. 骨接散藥

楊梅皮、黄柏、大黃 各十匁、犬山椒、耳草 三匁、粉末ニ為シ 極上酢デ練付ケル。

楊梅皮||ヤマモモの樹皮を楊梅皮(ようばいひ)タンニに富み止瀉作用がある。消炎作用もあるので筋肉痛や腰痛用の膏藥に使用する。

黄 柏||前に記載。

犬山椒||鎮咳、鎮痛作用があり、犬山椒の葉は濕布藥として打撲や打ち身、捻挫、むち打ちに使用。大黃、耳草は前に記載。

35. ローザワートル Rose water

野イバラの露、花ヲ取り水に和シ、ランビキニテトル。

石礮砂、龍腦合瓶ニ入レ貯事。

野イバラの花を水に浸しておき、この水をランビキ(蒸留用フラスコ)にいて精留する。

これに石礮砂、龍腦を加えて、瓶に入れて保存した。

香料として使用。

石礮砂||「ほうしゃ」はホウ酸ナトリウムの水和物。

解毒消腫、防腐、吐痰、解毒・消腫、防腐作用有り。

36. \*花の露||いばらの花を浸した水を精留したもの、丁子、香り藥を加えて使用。ローズ・ワートルを参照。

37. \*梅花油||梅の花の香りがする頭髮用の水油。

38. 金消丸

硫黄 十匁、菊目石 十匁、戒煙土 一匁、麝香 五分、

金箔 三枚、飯丸、

大ささ 銀箔衣、

硫黄Ⅱ殺虫医瘡、止痒 頑固で堅い陰疽（化膿傾向に乏しい慢性炎症）、頑癬、瘡瘡などに、輕粉、雄黄、枯礬、竜腦などと粉末にして外用する。

戒煙土Ⅱ不詳

麝香Ⅱじゃこうは雄のジャコウジカの腹部にある香囊

（ジャコウ腺）から得られる分泌物を乾燥した香料・

生薬の一種であり、主成分はムスコンである。興奮作用や強心作用、男性ホルモン様作用といった薬理作用を持つとされる。

菊目石 サンゴの一種

39. 血止妙薬

松木之上皮ヲ去リ、甘皮ヲ少シトリ、口先ニテ齒ニテ少シミガクト カミテ 其ママ伺ル事 妙ナルヲ発シテ鳴ル其声強ク鞭ヲ揮力如シ 此塩木炭之末ヲ和メ、木ニ塗、砂紙ニテ引時火ヲ発シ甚タ、

黒松の樹脂Ⅱ軟膏材料、松葉に高血圧、中風に効あり、

40 長血妙薬 但シ 血止

廉角細末 其倦用之、

廉角Ⅱ不詳

41. 火腹妙薬

灰・白糖、等分合、玉子白身ニテネリ、鳥羽ニテ伺ル、

42. \*蛇咬妙薬Ⅱ人の尿を使用、ツユクサ、アカザ等を使用、

民間薬、

43. \*瘡毒丸Ⅱ梅毒の薬、希釈な昇汞水を服用した、

天野孝亭之伝は不詳

その他

44. 虱抜油

鬢付け油 二十五分、樟腦 十分、水銀 四分、

能ク煉リ合シ付ケル、

45. \*蚊蠅蚤去

（処方箋なし、解説不可）

46. 鍼針塗薬

水銀 十、生錫 四、烱、

天花粉 和合テ 為 禾針ニ塗 用、針施付痛不覺、

47. 田虫伝法

接骨木 ニワトコ、湿布剤、下剤（若葉）、発氣、解熱、

利尿作用、

木通Ⅱモクツウ、アケビ、利尿、抗炎症、通乳作用

チヨレイⅡサルノコシカケ科キノコ、チヨレイ

マイタケの菌核、利尿、解熱、健胃、抗腫瘍性有り、

芍薬Ⅱ根部、消炎、鎮痛、抗菌、止血、痙攣作用、アルカロイド、ペオニン、*Peonia latiflora*.

沢瀉Ⅱタクシヤ、オモダカ根茎、抗腎炎作用。

蒼朮Ⅱアオキ、おできに付ける、苦味健胃。

圭土Ⅱケイシ、桂支、クスノキ科、発汗、解肌、解熱、利尿抗菌作用、抗アレルギー、中枢抑制、心臓抑制作用あり、各等分

大黄Ⅱダイオウ、タデ科、根茎、中（半分か？）

消炎、止血、緩下作用、瀉下剤、便秘に効あり、有効

成分 センノサイド。

50. 茯苓Ⅱリヨウブ 三分、耳竹 少し、同付葉。

雄黄 八分、山椒 二分、消石 一分、樟腦

一分、明礬 四分

右 為末 用ふ、和大黄根 搗汁 交和調製膏

耳竹Ⅱ不詳、スギヒラタケをミミタケともよぶ。

51. ケレスベル

大便石利水筒ヲ肛門ニサス 先ズ 大黄耆ヲ水三合ニ入レ、煮沸シテ、硝石耆ヲ加工溶カシ、残渣ヲ去リ、密耆勿入レ、交ゼル、五淋病ノ妙藥。

ケレスベルは和製のオランダ語擬きと見られる。

淋菌 (*Neisseria gonorrhoeae*) から五淋病と言ったと

見られる。要調査

大黄Ⅱラバルバルム、センナ、タデ科大黄の根茎を粉末として使用、センノシドを含有する。下痢、便秘薬として使用。

大黄Ⅰ匁を水三合に加え、煮沸する。これに硝石Ⅰ匁を加えて溶かし、不溶物を除き、これに蜜Ⅰ匁を加えて良く混ぜる。これを肛門内に注入する、淋病の妙薬である。

52. 淋病

白薑、蚤 乾イタカイコ 七口半、耳草、大白 二十五口、夏

古本草 (カコソウ) 三十口、水 七合五尺入、五合煎

口は匁とみられる。

白薑Ⅱ白シヨウガ。

夏古本草Ⅱシソ科ウツボクサ、(別名、カコソウ、夏枯草)

漢方、抗炎症作用、利尿薬。

大白Ⅱ不詳、大白糖か。

53. 痢病

罌粟子 二両、荊芥穂 一両、上品引茶一両

為細末、赤痢病ハヨモギノ煎汁ニテ下ス。

白痢病ハ「メシノトリ湯」ニテ下ス。

ムクロジユ ブツ 黒焼為細末 一両ヒ用ス時ハ痢病二不成。

罌粟子Ⅱケン粒、*Papaver somniferum*。

漢方薬として強壯・止血・消炎などの薬効がある。

荊芥穂Ⅱケイカイスイ、アリタソウの種、花、穂の乾燥物、発汗、解熱、血行促進、止血作用、産後の良薬。  
上品引茶Ⅱ 上質茶か？

#### 54. 痢病除丸

ムクロジュ 黒焼き 八匁、檳榔子黒焼 二匁。

丸三、五粒 服 三度用 一日、

ムクロジュⅡ強壯・止血・消炎作用あり。

檳榔子Ⅱ *Areca catechu* ビンロウジュの果皮を除いた

種子の黒焼き。アレコリン、アレカタンニンを含む。

驅虫薬、健胃、収斂薬、染料。

#### 55. \* 赤万能膏Ⅱ

三重県四日市市の鈴木薬局（旧鈴木製薬所）で製造・販売した「赤万能即治膏」や萬金丹などの膏薬か？

### Ⅲ. 産科

#### 56. 乳出来物散シ。

神馬草ホタワラ（ホンダワラ） 黒焼キヲ酢ニテ煉リ 張り付ケ。  
アカモク（じんばそう）を黒焼きして、これを酢でねって、患部に貼り付ける。これは民間薬と見られる。

#### 57. 乳之出妙薬

益母草 三匁、当飯 一匁、川芎 一匁、蒲黄 一匁、耳草 一匁、鹿茸黒焼。

益母草 Ⅱメハジキ、全草乾燥、血分を改善、産後体力回復。

当飯Ⅱ当歸、トウキ、セリ科シシウド、*Angelica*

*acutifolia*. 根部、血液循環を高める、充血解消。

川芎Ⅱセンキュウ、セリ科、根茎、補血作用。

蒲黄Ⅱホオウガマの花粉、利尿、通経作用、止血作用。

耳草Ⅱユキノシタ。

鹿茸黒焼Ⅱ強精、強壯作用。

いずれも体力を改善して、母乳の分泌を促している。

#### 58. 諸乳病疼痛止め妙薬

黄柏 代十文、角石 代十文、ソバノコ 半分

各調合為 三服、但シ一服 三ツ二分ケ、水二服用。

二ツ分 水二和シテネリ、鳥羽ニテ下ヨリ上へ塗り上付

ル事。

尤 白粥ヲ用 湿ニシテ、アセヲデル時、其レ巻キ痛止

ス。

黄 柏Ⅱ黄蘗 キハダ、*Phellodendron amurense*

ベルベリン、抗菌作用、健胃整腸剤。

角 石Ⅱ珪酸質の岩石、磷酸カルシウムの異称。

### Ⅳ. 眼科

#### 59. 瞳子散大付薬

野イバラ 蒸留水ヲ以テ 硼砂 龍腦ヲ和交シ其液振ニ付ル。

野いばらの果実エキス（エイジツエキス）にはフラボノイドが含まれ、美白作用、収斂作用、抗酸化作用などがある。硼砂には洗浄作用・消毒作用、龍腦は香料としてゐる。野イバラの果実のエキスに硼砂を溶かし、これに龍腦を加えて混合して、瞳孔散大の為の眼クスリにした。

## 60. 星流茶

硝石、丹礬、明礬、等分 為シ 禾器内 文火二炷シ 泡去テ候、烏賊骨禾 三匁、之一和攪、乾ヲ為度ニ、龍腦少シ和シ、水ニトキテ 眼二点ジ、若此茶ニテ星流ナレハ、白丹眼礬 一味 水ニテ溶カシ点事 度々。

硝石 $\parallel$ 硝酸カリウム、丹礬 $\parallel$ 銅明礬、明礬

$K_2SO_4, Al_2(SO_4)_3$ の複塩。

烏賊骨 $\parallel$ うごくこつ、甲イカの甲骨、制酸剤、止血剤として使用。収斂止血、固精止帶、制酸止痛、収溫斂瘡作用あり。

白丹眼礬 $\parallel$ 不詳、白丹礬か無水銅明礬？

硝石、丹礬、明礬を混合して加熱すると酸が出来る。これに烏賊骨を加えて中和して乾かし、龍腦で香りを付たものを、水に溶かして点眼薬とした。

## 61. 八流丸

燒明礬 一匁、巴豆 一匁、附子 一匁、雄黃 五分、辰

砂 五分、諸病二用。

燒明礬 $\parallel$ 収斂作用、殺菌作用、洗眼、含嗽。

巴豆 $\parallel$ ハズ *Croton tigurum*, トウダイグサ科ハズ属、英名 *Croton*, 峻下作用。

附子 $\parallel$ フス、キンボウゲ科トリカブト 又ハ近縁種の子根（塊根）、痛み、しびれを止める。

雄黃 $\parallel$ orpiment, 砒素鉱石、硫化砒素、下毒、抗炎症作用。

辰砂 $\parallel$ シンサ、硫化水銀、殺菌作用。

## 62. 目薬

炉岩石 二十目、海螵蛸 二十目、硼砂 二十目、辰砂 四十目、龍腦 四十目、蜜煉 目点。

炉岩石 $\parallel$ 不詳

海螵蛸 $\parallel$ 甲イカの甲骨、烏賊骨の別名、鎮静、催眠作用、辰砂 $\parallel$ 硫化水銀、殺菌作用。

龍腦 $\parallel$ ボルネオール、漢方では歯痛、明目に使用。熱性痙攣、咽喉痛、歯痛、眼疾患に使用。「きつけ薬」の一種。蜜で煉つて、点眼する。

## 63. 目星取薬

耳草ヲ切 水浸、ランビキニテ 露ヲ取 其水ノ内ニ 青

トクサヲ切浸 ランビキニテ 露取り用、但シ

初耳草水ニシタシ、其水ニ入レテモ良シ。

耳草 Ⅱ ユキノシタ、虎耳草、中耳炎、腫れ物、できもの、

ひきつけ、痔、むくみ、てんかん、等に効あり。

青トクサ Ⅱ 煎液を飲用すると目の充血や涙目に効果があり。

64. \* 目之星被

(処方箋無く不詳)

65. ワキ目妙薬 (目星取秘)

蠅首 Ⅱ 斗り取り、絹切二包、絞り出シ汁二 乳汁ヲ交ぜ、点、又 メウガノ汁毛為良。

66. \* 眼病そこひ針法

『癩祭録』 土生玄碩 口授

西洋流実験的眼科医の始祖といわれる土生玄碩の『癩祭録』には載せられていない秘伝の手術法として、開瞳法(仮瞳孔術)と直針法、横針法による白内障手術がある。開瞳法は横針法による手術を行った折、しろそこひ(白翳)は墜ちずそのまま、虹彩の結膜に近いところに小さい孔があいたために復明した事例から発明された方法である。

67. \* 目洗薬

(処方箋無く不詳)

V. 耳鼻科

68. 耳之薬

柴胡 大、黄芩、麦門冬、生地黄、石菖蒲、各中、耳草

少、煎じ服用。

サイコを中心に、オウゴンなどを中程の量とし、ユキノ

シタを少量加えて煎じた溶液を服用した。

柴胡 Ⅱ サイコ、ミシマサイコの根、消炎 解毒 鎮痛作用。

黄芩 Ⅱ オウゴン、コガネバナ *Scutellaria baricolenis*

のアロマオイル、清熱作用、抗炎症作用。

麦門冬 Ⅱ バクモンドウ、ユリ科ジャノヒゲの塊茎を乾燥

したもの、強壯、解熱、鎮咳、気管支炎、喘息などに

効あり。

生地黄 Ⅱ ショウジオウ、アカヤジオウ (ゴマノハグサ科)

の根の日陰干しのも、腫れ物の熱をとる作用あり。

石菖蒲 Ⅱ セキショウ、イシアヤメ *Acorus gramineus*

の根茎、腹痛、てんかん、健忘症、リウマチに効あり。

耳草 Ⅱ ユキノシタ、虎耳草、中耳炎、腫れ物、できも

の、ひきつけ、痔、むくみ、てんかん、等に効あり。

69. 耳薬

大茴香、二匁、广香 (麝香) 五分、子キ白根 一分、

巫爾箇児二浸 一滴ヲサス。

大茴香 Ⅱ タイウイキョウ *Illicium verum* 中国原産シキ

ミ科常緑高木の果実を香辛料に使用、ウイキョウの精油、漢方では腰痛に使用、胃腸機能回復、鎮痛剤、有

毒成分 shikimin. 嘔吐, 脚氣に効あり.

麝香は中国語のファイルにのみ見られ、日本語のファイルには見られない。「<sup>げんこう</sup>」は「麝」の略字として使用されていたと見られる.

麝香Ⅱじゃこう、雄のジャコウジカの腹部の香囊（ジャコウ腺）から分泌される物を乾燥した香料・生薬、主成分はムスコンである、興奮作用や強心作用、男性ホルモン様の薬理作用を持つ.

キ白根Ⅱ葱の白根

大茴香、麝香、白ネギ根をアルコールに浸し、その抽出液を耳薬とした.

## VI. 齒科

### 70. 丁子油

クローブ (Clove)Ⅱフトモモ科のチョウジノキ

(*Syzygium aromaticum*, syn. *Eugeni aromatica*)

の開花前の花蕾を乾燥させた香辛料の名前、花蕾を丁子または丁香とも言う.

芳香健胃剤、香氣成分はオイゲノール (Eugenol) で、精油には殺菌・防腐作用あり、弱い麻酔・鎮痛作用もある、歯痛の鎮痛剤として使用される.

酒石Ⅱ(catta) 酒石酸カリウムであり、ブドウ酒の貯蔵により沈殿物として酒石が出来る.

### 71. 齒藥

硼砂 十匁、辰砂 十匁、反腦 十匁、龍腦 三匁、硝石 十匁、古口 五匁、丁子 五匁、

極細末二為、齒痛塗服 中二内テ魚毒.

反腦Ⅱへんのう、龍腦香（略）樟腦再燒者名反腦とある、樟腦を再精留して透明にしたもの.

古口Ⅱ不詳

### 72. 齒疼時含煎湯

燒明礬 一匁、烏梅 一匁、桔梗根 一匁、耳草 七分、水 一合半入、一合取、含咄出シ去.

燒明礬Ⅱ殺菌作用？

烏梅Ⅱウバイ、青梅をわらで燻した黒焼き・乾燥物.

鎮痛、解毒作用（民間薬で使用）.

桔梗根Ⅱサボニン、鎮痛、解熱作用あり、耳草Ⅱユキノシタ、解毒、利尿作用あり.

### 73. 齒疼止

乾蛇 為細末 丁子禾少シ加 紙包疼齒クワエル 黒鉛少シ付ルモ又妙ナリ.

マムシの乾燥粉末に丁子を少量加えて、紙に包み、痛い齒の間に咥える、黒鉛を少し加えるのも良し.

丁子は齒痛の鎮痛剤に使用.

## VII. 肛門科

74. 痔病

鷹目硫黄 三日 口硝 一目半、大白 七十目、

7ツ分、一日一服 宛用、但シ 肛門ノフチニ灸点、女右、

男 左方、

鷹目硫黄 華硫黄？ 大白 華硫黄、

口硝 芒硝、硫酸ナトリウム？

75. 痔諸付薬

明礬 十二匁・半分砂 為細末 鍋デ墨ト交合 ネズミ色

ト為シ 三年味噌一匁二分ト右ノ粉七分合シ、布二包ミ、

湯之中ニ振ダシ、湯洗 但シ 水五合之湯、

76. 小便閉握薬

巴豆 三匁、昆麻子 二匁、大黄 三匁、オクリカンキリ

三匁、耳草 少シ、蜜丸、蜀椒煮汁ニテ 手洗而後握、

巴豆 前二掲載、大黄 前二掲載、

昆麻子 不詳、

オクリカンキリ 〓 *Oculi cancri*、ザリガニの胃石、ら蛭石、

利尿剤、眼病薬にも使用、

耳草 〓 ユキノシタ、硝酸カリウム、塩化カリウム（利尿

作用）、ベルゲニンは解毒作用あり、主として民間薬と

して使用、

77. \*阿片製法 〓 ケシの実に傷を付けると、乳状液がえられ、これに阿片が含まれる、

VIII. 解説不可能な処方

蜜之煮法、蚤帶之法、童子散、生葉色肉、ヤツボ膏、雷火

灸艾、ラツダ 吐血薬、溜飲丸、毒鼠薬、焼塩、清朝程赤

城伝、回天神秘丸、加味豆淋酒、飯膊湯、切疵又ウテニク

渡シ薬、神靈丸、ソゲ祓散、足裏皮、雷火灸、ホウソウ山

ヲ上ル、以上20点、

これらは原史料には、各々の処方箋が記載されていたと見られるが、資料2には記載されていない、

## 考察

本論文では、大野弁吉の『一東視窮録 製薬 上』の解説を行い、77種の処方箋の解説・解説を行った。さらに、原史料では処方箋の記載順が不規則であり、これを改めて医療対象の分野別に7科に分類して記述した。この結果、呼吸器内科ではどの様な処方箋があったか、消化器内科、産科、歯科、眼科などでの使用されていた処方箋の共通点も理解することが出来る様になった、

スロイスの薬剤学では、水銀化合物（昇汞、辰砂など）、麻薬類（阿片など）を使用した処方箋が多くある（7）。また、シーボルトの処方箋でもこれらを使用したものがある（8）。特に、痛み止め、鎮痛剤として阿片が多く使用されていた。また、殺菌剤として水銀化合物が使用されていた。柳の皮



を鎮痛薬としたものは見当たらなかった。

オランダ語は「ナーゲルヨリー」(丁子油)、「ヨリーナ  
ンバルステーン」(琥珀油)、「ローザワートル」(バラ水)  
と僅かしかない。バジリコン Basilica olie、オクリカンキ  
Oculi Cancr.、キレンケツ 麒麟血、ランビキ (蒸留器)  
などの外来語もある。

本製薬史料に「子ヲ生ザル薬」が記載されていることは  
注目に値する。綿の種子を3〜5粒ばかりを吞むと不妊に  
なるとのことである。これは綿の種子には有毒な赤色素  
gossypolがあり、1937年に単離され、ナフターレン誘導  
体であることが同定されている。本書の成立が嘉永五年頃  
(〜1853)と見られている(1)。また、米国の奴隷に  
よる綿花栽培が行われていたのは1850〜60年頃であり、  
奴隷女性の避妊・墮胎のために綿の根皮が使用されていた  
記述がある(9)。アメリカの奴隷制時代には、ワタの根の  
皮を墮胎薬として利用する民間療法があり、十九世紀半ば  
には既に、綿の種子、根皮による避妊・墮胎が広く行われ  
ていたものと見られる。現今でも、ゴシボールの生理作用  
の研究論文があり、さらに中国ではこの化合物による男性  
の避妊が行われているとの情報もある。但し、一方ではゴ  
シボールによる造腫瘍作用も記載されている。シーボルト  
の治療薬およびスロイスの薬剤学にはゴシボールの記載は

ない。

本書の「含密術関係項目」に甘硝石精(サルベートルア  
テル)が記載されている(2)。これは硝酸をアルコール(酒  
精)に加えただけの茶褐色の溶液である。硝酸がアルコー  
ルにより還元されて一酸化窒素となり、これが血管拡張な  
ど生理作用をおこす。その為に喘息、咳などの治療に使用  
されていた。甘硝石精はシーボルト、スロイスによっても  
講義されていた(10)。

ホルトス、ウユルス(ウルユス)、ケレスベルの三処方  
は、外来の処方では無く、オランダ由来の処方にあやかり、和  
製オランダ語擬きの名前を薬品に付けたものである。特に、  
ホルトスは「根元長崎觀生堂、諸国取引所 大坂本店、大  
坂長堀橋南口 大橋喜兵衛、売弘所 肥前長崎袋町 岡村  
屋宗兵衛」の広告、および「ホルトス弘方心得書」(宣伝資料)  
などが残っている(6)。カタカナ名を付けて薬品の売増  
を目論んでいた。

弁吉の薬剤処方には、外来植物を原料とした処方は少な  
い。本資料には、蘭方薬処方では屢々見られる次の薬材は  
記載されていない。これらの薬材は蘭語の当て字およびカ  
ナ書きで記されているから容易に判断が出来る。

葯刺巴・ヤラツパ・下剤、没食子・ボツシヨクシ・  
収斂剤、薄荷・ハツカ・メントール・驅風剤など

さらに、シーボルトの医療薬「十八道薬剤」(8)との比較、さらにスロイスの薬剤学(7)との比較から、この薬剤処方方は漢方の処方および民間薬の処方を蒐集して記したものと考えられる。各処方の系統性もなく、分類もされていないこと、さらに薬効の記されていない処方も幾つかある。また、此処に記載されている処方を実際に使用していたか否かを判断するためには、弁吉が医療行為を行って居たことを示す別の史料が必要である。

このことから、弁吉は「製薬」についてそれほど深い知識はなく、また特に学んではいなかったと結論づけられる。

## 文 献

1. 本康宏史,「大野弁吉再考」―地域科学史研究の前提―『石川県立歴史博物館紀要』第九号, 33―53頁, 1996年(本康『からくり師 大野弁吉の時代―技術文化と地域社会―』岩田書院, 2007年所収)。
2. 小林忠雄,「絡繰師大野弁吉の伝承的世界とその構造」『国立歴史民俗博物館研究報告書』第36集, 295―330頁, 1991年11月。
3. 『東視究録 製薬 上』大友家蔵。
4. 文献1, 36―38頁。
5. 本康宏史,「日本薬学会2009年会(金沢)講演要

旨集」, 9―13頁。

6. 『蘭方ホルトス弘方心得書』出版地不明, 出版者不明, 出版年不明, 一冊, 九州大学附属図書館蔵, 同図書館・古医書画像データベース。
7. スロイス「薬剤学」, 藤本純吉筆記 講義録、金沢市立玉川図書館・近世史料館蔵。
8. シーボルトの治療薬「十八道薬剤」,「長崎薬学史研究」長崎大学ホームページ。
9. L.M.Perrin, Resisting Reproduction: Reconsidering Slave Contraception in the Old South, J. Am. Studies, 35, (2001) 2, 255―274.
10. 板垣英治,「甘硝石精」とは、『北陸医史』第34号, 18―25頁, (2012)。

## 北陸医学史と大分・中津について

福井市 古林 秀 則

私は縁あつて平成十二年七月から平成二十四年三月まで大分医科大学・大分大学医学部で過ごした。その間、長崎大学医学部の創立百五十周年記念祝賀会に出席できた。平成二十四年四月に北陸に戻り、同年七月の金沢大学医学部創立百五十周年記念式典・祝賀会にも出席できた。ここで九州、特に大分県と北陸の医学史について述べてみたい。

一五四九年鹿児島に上陸したフランシスコ・ザビエルは一五五一年に大友宗麟の招きで府内(大分市)を訪れている。一五二五年リスボンに生まれたポルトガル人医師・修道士のルイス・デ・アルメイダ(写真1)は私財で一五五五年に「育児院」を府内に開設し、そこで牛を飼い子供たちに牛乳を飲ませている。二年後に日本最初の洋式病院「府内病院」を開設し外科手術も行っている。府内病院の評判は九州一円、京、大阪、関東にまで及んだが、アルメイダは一五八三年天草で死亡し、「府内病院」も一五八七年島津勢の豊後侵入で焼失してしまい、以後再建されなかった。この府内病院開設の丁度三〇〇年後、一八五七年に長崎大学

医学部が誕生した。アルメイダの名前は大分市医師会立アルメイダ病院として残った。平成二十一年一月十一日に開院四十周年記念祝賀会が開催され、ジョアオン・ペドロ・ザナッティ駐日ポルトガル共和国大使も出席された。

日本で最初に本格的な骨の解剖図を描いたのは中津藩医の根来東麟の父、東叔です。奈良の刑場で死体の骨を手に入れ、一七四一年に「人身連骨真景圖」を描いた。豊後の三賢三浦梅園(杵築)、帆足万里(日出)、廣瀬淡窓(日田)の三浦梅園はこの連骨図を模写している。山脇東洋は一七五四年に人体解剖を日本最初に試みた。一七七一年に中津藩前野良沢、小浜藩杉田玄白、中川淳庵らが江戸でターヘル・アナトミアを参照しながら解剖を試み、一七七四年に「解体新書」(写真2)を出版した。「解体新書」には蘭学に最も造詣が深かった前野良沢の名前が何故か載っていない。吉村昭の「冬の鷹」には、解体新書をめぐる二人の生き様が描かれていて考えさせられた。前野良沢が住んでいた中津藩(当時奥平家)中屋敷あとには「蘭学創始の碑」が建立され、ここは慶応義塾発祥の地でもある(築地、聖路加病院敷地内)(写真3)。中津藩で一八一九年に村上家七代、玄水によつて九州最初の解剖が行われた。日本における解剖史の中では二十六番目に相当する。村上玄水は帆足万里に解剖書の序文を頼んでいる。この解剖図は非常に

写実的で小腸の中のポリープまでも捕らえている。大分県北部の中津市では福沢諭吉旧宅も良いが、村上医科資料館も是非訪れてください。小生は北陸医史学会の会計篠原治道先生を村上医科資料館に案内した。村上家は初代宗伯がこの地で一六四〇年に開業して以来、十二代玄児まで継続し、資料館には三千点の資料が展示されている。医家・村上家初代「村上宗伯」は京で古林見宜ふるはやしけんぎの門下生となり、医学を学んでいます。古林見宜は播磨の人で、京都に出て、その頃の名医の曲直瀬玄朔、曲直瀬正純について李朱医学を修めた人で小生の先祖とは無関係の人です。村上家は村上水軍と関係があります。広島県佐伯郡大野町出身で私達が学4（医学部六年生）で習った村上元孝教授とも関係がありそうです。

日本の古い大学医学部の前身は医学塾・種痘所が多い。長崎大学医学部は一八五七年オランダ軍医ポンベ・ファン・メルデルフォルトの長崎奉行所での医学伝習開始を開学としている。東京大学医学部は一八五八年も神田御玉ヶ池種痘所設立を、金沢大学医学部は一八六二年彦三種痘所を源流としている。順天堂大学は一八三八年江戸薬研堀（東日本橋）の蘭方医学塾開設を開学としている。慶応義塾は一八五八年福沢諭吉が中津藩奥平家中屋敷で蘭学の家塾開設を開学としている。一七九八年に発表されたジェンナー

の牛痘種痘法は、一八四九年、長崎出島の蘭館医モーニケと佐賀藩榎林宗建の協力によってわが国にも広められた。笠原良策（福井藩）と日野鼎哉（大分県湯布院出身）は京都で榎林宗建の牛痘を分けてもらった。二人は大阪の除痘館で緒方洪庵に分苗した。日野鼎哉は日出の帆足万里に学んだ後、長崎のシーボルトの下で西洋医学を習得し、京都で開業した外科医である。笠原良策は吉村昭の「雪の花」では福井藩主に種痘治療を請願し、京都で牛痘を手に入れ、苦勞して越前に持ち帰った事を書いている。笠原良策は越前で加賀の黒川良安に分苗している。この加賀の種痘所が金沢大学医学部の前身である。医学部学生時代「黒川良安」のレリーフを眺めて通学していた。一八四九年に中津藩医辛島正庵からも長崎に病苗を貰いに行っている。痘瘡で長男を失った辛島正庵は種痘に熱心で中津では三千人に接種が行われている。この辛島正庵の直系が小生の前任医局に在籍している。

平成二十六年の乙未大河ドラマは黒田官兵衛（如水）で中津市は盛り上がっている。一五八七年秀吉から九州攻めの功として豊前に入国した黒田官兵衛（如水）が中津城の築城を開始した。黒田氏が福岡に移り、細川忠興が関ヶ原の戦いの功で転封して来て中津城が完成した。一六三二年細川氏が熊本に移り、小笠原長次が中津八万石を治めた。

藩主小笠原長胤は非行が多く、一六九八年本丸が焼け領地没収される。奥平氏は長篠の合戦で家康に応じて功をたて、奥平信昌は家康の娘・亀姫を娶って京都守護となり、美濃、宇都宮、古河、山形、宮津などを経て一七一七年奥平昌成の頃、豊前十万石に移って、明治に至っている。奥平昌高の治世下では中津藩の医界は村上玄水（上記）と大江春塘によって支えられた。藩主昌高はシーボルトとの親交も熱く、大江春塘に命じて蘭和辞書を刊行させた。春塘が一八二二年に刊行した辞書は、オランダのメイエル辞書のバスタード部の日本訳で中津バスタード辞書（写真4）と呼ばれ、村上医科資料館、金沢市立図書館、福井県立大野高校、京都の小石家などにも保存されている。外国ではアムステルダムから電車で三十分程のライデン大学図書館にも保存されているそうです。

大分医科大学に赴任し、中津市の川寫整形外科病院の川寫真人院長が会長を務める「マンダラゲの会」に入会させていただき、中津市、大分県、九州の医学史を勉強させて貰った。今後は再び北陸で勉強したいと考えている。

## 参考文献

- 小川鼎三（大分県杵築出身）著「医学の歴史」、中公新書、昭和三十九年
- 川寫真人著「中津藩蘭学の光芒」、豊前中津医学史散歩、西日本臨床医学研究所、平成十三年
- 高浦照明著「大分の医療史」、大分合同新聞社
- 豊田寛三、後藤宗俊、飯沼賢司、末廣利人著「大分県の歴史」、山川出版社、平成九年
- 東野利夫著「南蛮医アルメイダ」戦国日本を行きぬいたポルトガル人、柏書房、平成五年
- 横松宗 著「福沢諭吉」その発想のパラドックス、梓書院、平成十六年

## 写真説明



3. 蘭学創始の碑、慶応義塾発祥の地  
中津藩奥平家中屋敷で1771年前野良沢らがオランダ解剖書を読んだ由緒ある所、1858年福沢諭吉が蘭学の家塾を開く。聖路加病院構内。

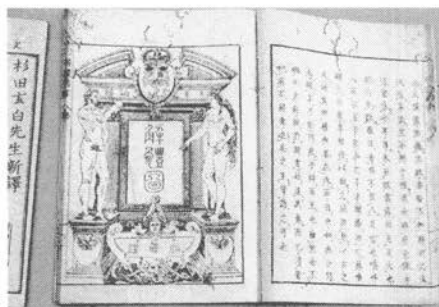


4. 中津バスタード辞書(村上医科資料館)  
藩主・奥平昌高の御典医、大江春塘がオランダのメイエル辞書のバスタード部を訳したもの。



1. 西洋医術発祥記念像

1557年に日本最初の洋式病院「府内病院」を開設し、青年医師アルメイダにより、洋式手術も行われた。この病院で医学教育も始められ、日本人学生が洋式医学を学んだ。



2. 解体新書(村上医科資料館)

中津藩前野良沢、小浜藩杉田玄白、中川淳庵らが江戸でターヘル・アナトミアを参照しながら解剖を試み、1774年に「解体新書」(写真2)を出版した。